

近況報告



## 「北欧」を旅してきました。



横浜市 三戸岡 憑之

1997年にコスモ石油を定年退職した後、都内のある企業で、特殊法人科学技術情報センター（現独立行政法人科学技術振興機構）が主管している科学技術文献データベース作成の仕事を手伝ってきましたが、2002年、長いサラリーマン生活に終止符を打って通勤地獄から脱出。今ではその仕事を自宅で行っておりますが、わずかながらの小遣い稼ぎといったところでしょうか。

コスモ石油定年の年、リフレッシュ休暇制度を利用してスイス・ヨーロッパアルプスをハイキングしましたが、マッターホルンの雄姿に魅せられて以来、カナディアン・ロッキー（アシニボイン）、中国四川省（高地に咲くブルーポピー）、チロル・ドロミテの東部ヨーロッパ・アルプス（ドライチンネン）などでかけ、高山植物や山岳景観との出会いを求めながら海外でのハイキングを楽しんできました。



昨年は二世帯住宅を建てたりしたものですから、海外は見送らざるを得ませんでした。旅の資金に目処がついた今年、そろそろ年齢的にも無理がきかなくなってきたことも考えて、海外でのガレ場などを自分の足で歩き回ることをひとまず止めにし、かねてから一度は訪れてみたかった「北欧」のとくに神秘的なフィヨルドの景観を楽しむ旅に出かけてきました。アテネ五輪が始まる少し前の2004年8月11日から21日までのことです。

長年、フィルムカメラを愛用してきましたが、このほど、待望の一眼レフ型デジタルカメラを入手することができましたので、今回の旅行ではそれをフル活用し、なんとかよい写真をと願いながら、旅行中は一日150回以上もシャッターを切り続けたのですが、技術不足の駄作ばかりでいささか失望気味です。



まずまずと思われるフイヨルドでの写真三枚をお示ししましたので、その景観の一端をご覧ください。

今回の旅のハイライトはなんといっても、**ノルウェー**の世界最長といわれる、北極海に近い海に面した250km

にも及ぶ細長い入江の**ソグネフィヨルド**を船で旅することでしたが、限れた時間ではその一部にしか接することができませんでした。それでも、次々に展開されていくその景観には圧倒され、深い感銘を受けたのはひとり私だけのことだったでしょうか。その一方、切り立つ断崖の



上やわずかな斜面での牧畜で生計を立てている人々の生活がそこにあることを知り、なにゆえにこのような場所に人が住まなければならないのかと、ふと考えさせられる一面もありました。

複雑な地形のスカンジナビア半島に存在する「北欧」では、氷河のいたずらでできた多くの湖とそれを囲む森林の美しさが目立ちます。その森林に住むという伝説の妖精「**トロル**」がい



たとところで私たちに歓迎。とっつきにくい表情をしていて初めは敬遠気味だったものの、よくよくみると愛嬌があり、旅の終わりころには親しみさえ覚えるようになっていました。



ヨーロッパ・アルプスでは、谷あいを下る氷河を上から眺めることが多かったのですが、ノルウェーでは、山頂から山あいを下ってくる氷河を下から見上げ、その先端に接することができました。氷河独特の青白色はこれまでにない美しいものでした。



**フィンランド**の首都**ヘルシンキ**からスウェーデンのストックホルムへは、2700人もの乗客を乗船させ、宿泊させることができる客船「シリアライン・シンフォニー号」に乗った一晩かけてバルト海を西に向かう船旅でしたが、これも今回のハイライトのひとつ。船内は7階から13階にわたって吹き抜けになっていて、アーケードの下に賑わう街並みを思わせる雰囲気

が漂い、これが船内でのことかと驚くほど。バイキング料理の元祖とも言われるスカンジナビアのスモーガスボードに舌鼓をうったのもこの夜のことです。

**スウェーデン**の首都**ストックホルム**では、ノーベルの誕生日に開催されるノーベル賞受賞式後の、公式晩餐会が催される市庁舎内の会場を訪れました。その会場となる部屋は広いものの、しかしながら、晩餐会の華やかさを醸し出すにはほど遠いレンガ造りの質素なものでした。



今回の旅はまた、ノルウェーの作曲家**グリーグ**や画家**ムンク**を初め、フィンランドでは作曲家**シベリウス**、デンマークでは作家**アンデルセン**など、北欧の



芸術家や文学者たちの足跡をたどる旅でもありました。ノルウェー国立美術館では、過去に盗難事件に遭遇したことがあるムンクの名画「**叫び**」を鑑賞。この美術館は入場無料であるうえ、フラッシュをたかなければ写真やビデオの撮影が許されます。このようなことは日本では考えられないこと。ムンクは同じ絵を何枚か描き残し、遺言によってそれらすべてがノルウェーの首都オスロ市に寄贈されたそうですが、私どもが帰国してまもなく、近くのムンク美術館に展示されていた「叫び」と「マドンナ」の二枚が、白昼、鑑賞者のいる前で強奪されたとのニュースが流れ、びっくり仰天。

ノルウェーの第二の都市**ベルゲン**には**グリーグ**がその生涯を閉じるまで過ごしていた家と作曲活動した小さな仕事場が残されていますが、そこは静かな湖に面したところでした。後に建てられた小規模なコンサートホール正面の窓越しに、その仕事場の屋根を望むことができます。



**ベルゲン**は一年のうち300日は雨だといわれますが、そこを訪れた日は余りにも明るい陽のさす日でした。世界遺産に登録されているブリッゲン地区には、ドイツ貿易商人がニシンやタラの買い付けにくることで生まれた「ドイツ・ハンザ同盟」の、14世紀ころに建築された木造の建物が現存しますが、建物自体はかなりきしんでいてゆがみがひどく、隣接する建物同士が互いに助け合ってやっとその形を維持しているといった感じです。

デンマークの首都コペンハーゲンでは、海辺の岩の上に置かれた、アンデルセンの童話をモデルにした「人魚姫」の像を鑑賞。あいにく逆光とあって、撮影には不向きな時刻でしたが、なんとかカメラに収めることができました。その像はあまり大きくありませんが、大勢の人が記念写真の撮影に余念がありません。最近はその人をねらったスリが横行しているとかで、撮影に許された時間はわずかでした。人魚姫の首から上が切り取られるという悲しい出来事がここでも起こっています。いまの像は復元されたものだそうです。



北欧はアイスランドを含めて五カ国からなりますが、とくに今回訪れた四つの国はいずれも福祉国家として世界の注目を集めております。しかし、この国の人たちはその福祉財源に対してそれなりに大きな犠牲？を払っており、とにかく所得や消費に対する税率が日本のそれに比べて段違いに高いことを知りました。現在フィンランドは EU に加盟しておりますが、その他の国はそれぞれに個性が強く、独自の思惑を貫くことで EU にはいまだ加盟しておりません。したがって、国ごとに通貨がすべて異なり、両替に気を使う旅でもありました。

帰国後間もない今、次回はどこに行こうかなどと考えをめぐらせながら、写真やビデオの整理などで旅の余韻を楽しんでいます。

いささか長い旅の話になってしまいましたが、これを近況報告にかえさせていただきますので、あしからず。

次回のこの「近況報告」リレーを、重質油研究組合の共同研究者として大変お世話になった「富井 達」さんにバトンタッチさせていただきたく存じますので、どうぞよろしく。